

湯気をはく台地

湯之元温泉における温泉文化の継承と地域コミュニティの場の提案

鹿児島県の西部に位置する日置市に湧く湯之元温泉郷と呼ばれる温泉地がある。

かつては湯治地として賑わい溢れるまちだった。

家庭に浴室が設けられた現在、温泉文化は廃れ、当時の面影は薄くなってしまった。

そこで、この土地の風土に馴染んだ、まちの活性化につながる湯治施設と
地域コミュニティの場を提案する。

01 背景

□ 湯之元温泉

—鹿児島県日置市東市来町湯田地区—

鹿児島県西部、薩摩半島のほぼ中央に位置する日置市に湧く温泉地。泉質は無色透明の単純硫黄泉と単純泉で皮膚病や神経病、婦人病に効果があるとされている。現在は69ヶ所の泉源が存在する。

温泉が発見されたのは1640年ごろ。その後開発され、1860年までは薩摩藩直轄で運営されていた。倒幕後は、漁業や農業で疲れた人々の体を癒す湯治場として多くの客が訪れ、歓楽街として賑わっていた。現在、町には11つの温泉施設があり、そのうち立ち寄り風呂が8つ存在する。立ち寄り湯は宿のない温泉で、家族湯、大浴場や露天風呂など、様々な形式の温泉施設があり、地元の人々に愛されている。

まちへのアクセスは電車で30分、鹿児島市から車で40分、鹿児島空港からは1時間の場所にあり、鹿児島市のベッドタウンとして位置づけられている。

□ 社会の変化に伴う温泉文化の衰退

地域の人々に長らく慕われてきた町の温泉であるが、ほとんどの家に浴室を備えられ浴室保有率が97%を超えた現在、一部のファン残るものの、温泉に通うという文化は特に若い年代では昔よりも少なくなり、日常的に**温泉に入る人は減っている**ことが現状である。

□ 湯治について

湯治とは温泉地に長期間滞在し、温泉療養を行う行為である。湯治の「湯」は薬湯、「治」は治療を意味し、病気や傷の治療を目的として温泉や薬湯につかり汗を流すことである。

現在、湯治はひとりもしくは少人数でゆっくり療養する印象が強いが、かつての湯治には療養と同時に社交的な要素も含まれており賑やかな場と認識されていた。

1600年代

1640年ごろ 湯之元温泉が発見され、薩摩藩直轄の湯として整備され、「御前湯」や「地頭湯」など身分によって使用する湯が異なっていた。

1800年代

1867年 江戸幕府消滅 市民も温泉に行くようになり、漁業や農業で疲れた体を癒す湯治場として多くの客が訪れ、歓楽街として賑

1900年代

1950年ごろ 家庭に浴室が設けられはじめ、人々の温泉に通うという習慣が少なくなる。

2000年代

2024年現在 主に地元の人が利用する温泉となり、温泉文化は廃れ、当時の面影が薄くなってしまった。

電車で30分
車で40分

日置市

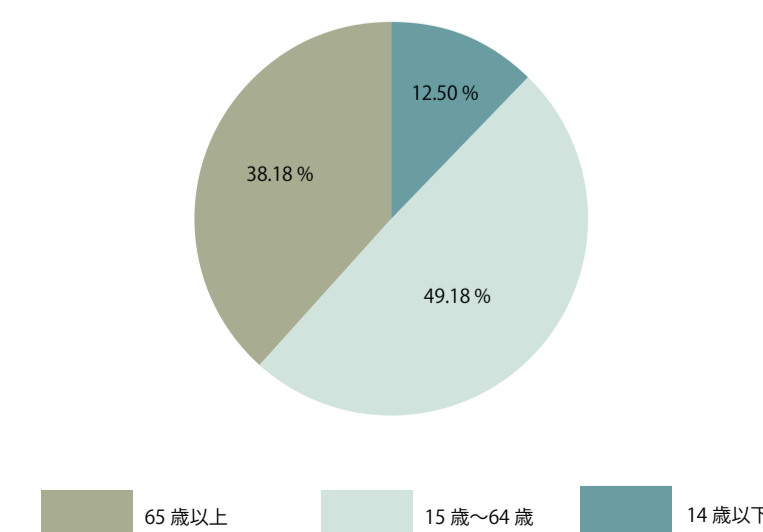
鹿児島市

□ 住民の少子高齢化と居場所の減少

湯田地区の人口は約4000人で65歳以上の高齢者の割合は38%、14歳以下の人口は12%であり、数年前と比べて少子高齢化が進行している。

まちの病院では高齢者が大勢集まり、溜まり場ようになっており終日混雑している光景がしばしば見られる。**高齢者の集まる場所が少ない**ことが原因であると考えられる。

さらに数年前にまちにあった大きな病院が移転し、まちから無くなったことで高齢者の集まる場所がより限定されてしまっていることが考えられる。また、まちには小学校があったり、中学生や高校生の通学路があったりするが、図書館や自習スペースなど、**気軽に勉強するスペースがない**ことも現状の課題である。

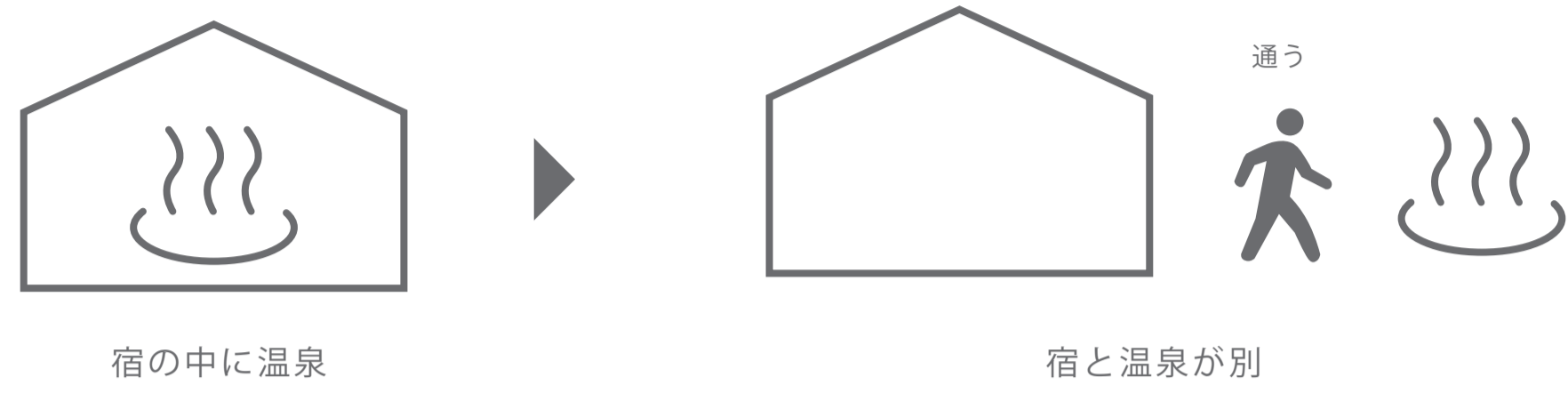


02 コンセプト

I. 温泉のない湯治施設

温泉に行くことが少なくなった現在、温泉に通うという行動を取り戻すために、湯治に訪れた湯治客が数日間でも**温泉に通うという行動が体験できる施設**を提案する。

これは、立ち寄り風呂の割合が多いという湯之元温泉の特徴を利用したものである。まちの温泉それぞれの雰囲気の違いを感じたり、まちの住民との交流を楽しんでもらうことができる。



II. 地域の人々の健康増進とコミュニティの場

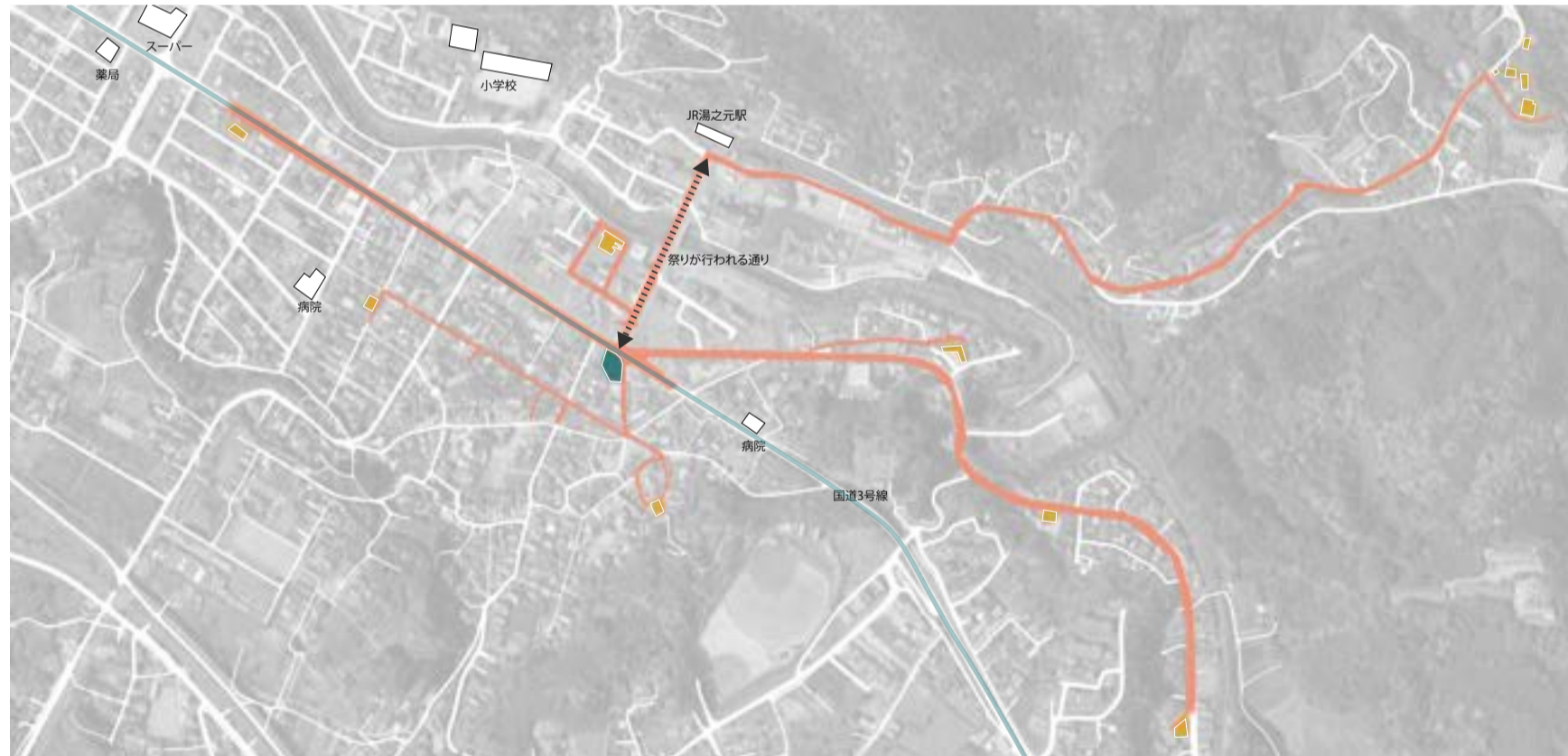
地域住民の少子高齢化や、元々少なかったまちの住民の集まる場所がさらに減少していることを受けて、温泉を活用した**健康増進の場**や**交流の場**を提案する。小学生から高齢者が集まる公私空間を作ること、多種多様な交流が生まれる。**地域住民と湯治客が交流**することも目的の一つである。

03 対象敷地

□ 周辺について

敷地はJR湯之元駅から目抜き通りと国道の交差点の場所で、小学生や中学生の通学路にもなっている。駅前の通りは、春に町の伝統的な祭りが行われ、当日は人が大勢集まる場所となっている。周辺には飲食店やスーパーマーケット、コンビニエンスストア、病院や薬局など、地域住民の生活のための施設が複数点在している。

敷地 温泉施設



□ 選定理由

この敷地はまちの百貨店があった場所で賑わいの拠点となっていた。

2020年に閉店し、更地になり現在も空き地のままとなっている。同じ場所に新たなまちの拠点を作り、賑わいを取り戻したいと思った。

さらにこの敷地はまちのほぼ中央にあり、まちの**立ち寄り風呂全てが徒歩20分圏内**であり、近い温泉で徒歩5分の場所にある。**湯治客が複数の温泉に通うための拠点**としてふさわしいと考え、この敷地を選定した。

□ 土地について — シラス台地 —

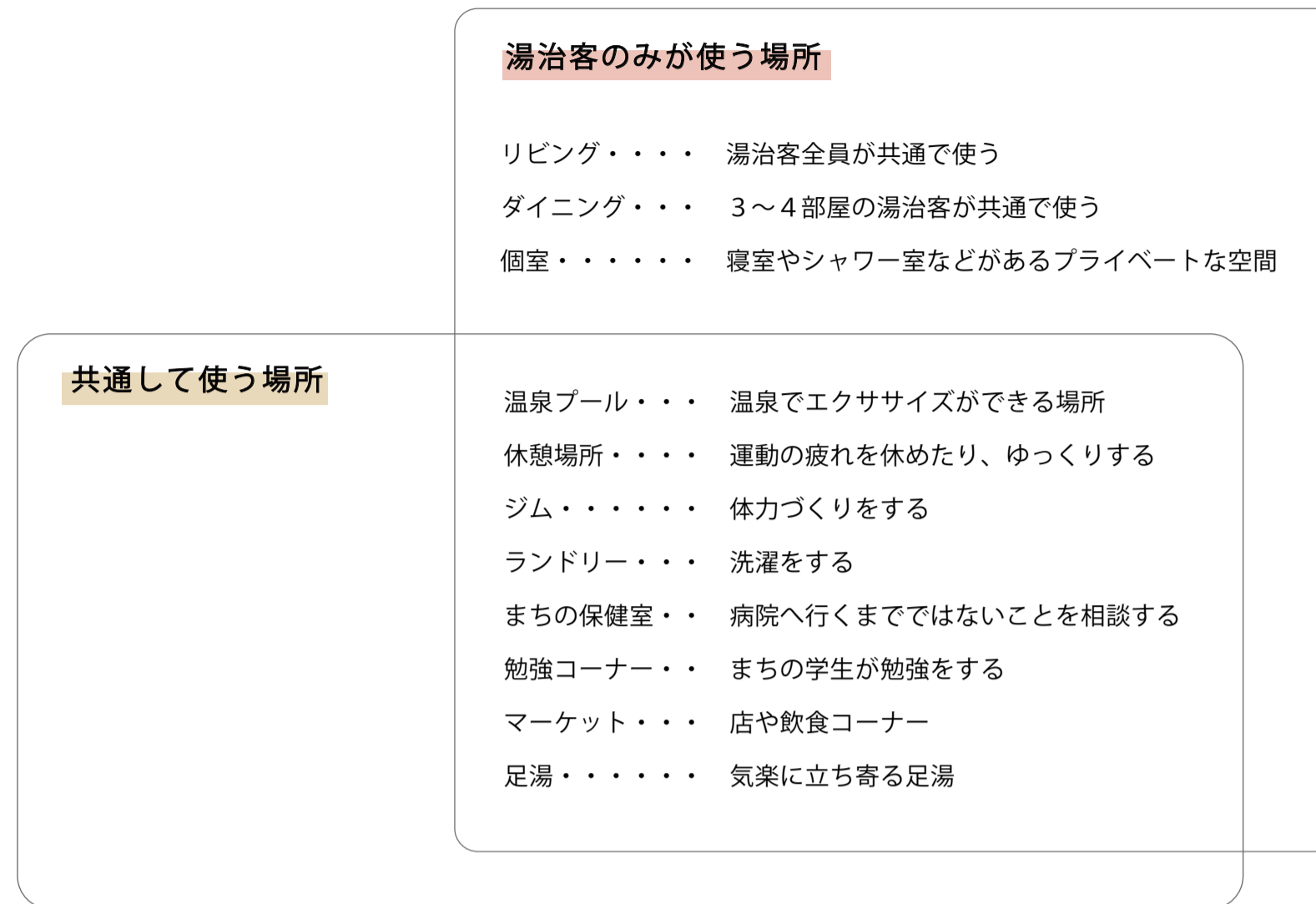
鹿児島県には、本土の約50%を覆っている**シラス台地**がある。火砕流で構成される台地で、水分を保持しにくい性質ということもあり、「不作の土地」として厄介者扱いされていた。しかし開発が進められ現在ではさつまいもや畜産などに利用されている。さらに湯之元の温泉の泉質にも大きく関わっており、地域の産業を支える重要な役割を果たしている土地である。また、近年ではブロックや外壁材、内装材など建築資材の原料としても使用されている。



▲日置市で見られるシラス台地の崖

□ 提案する機能

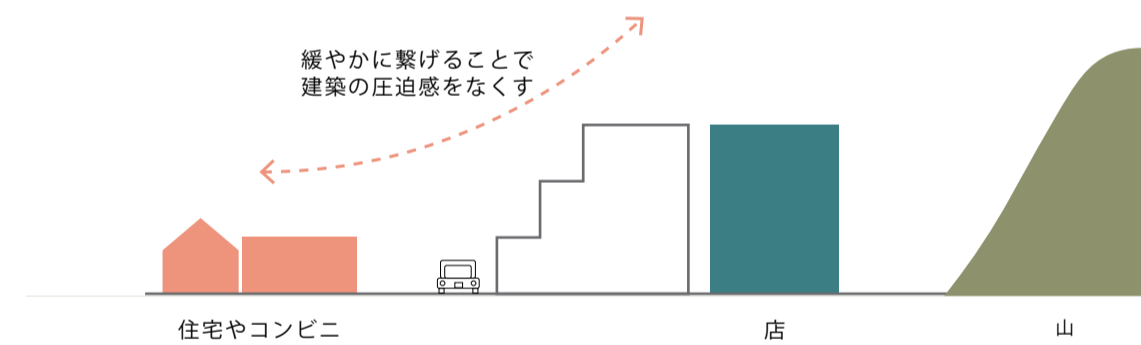
施設に取り入れる機能は、湯治客と地域住民や子供が積極的に交流できる仕組みを作るために、共通して利用する場所と、湯治客のみが利用する場所を取り入れる。



04 建築の構成

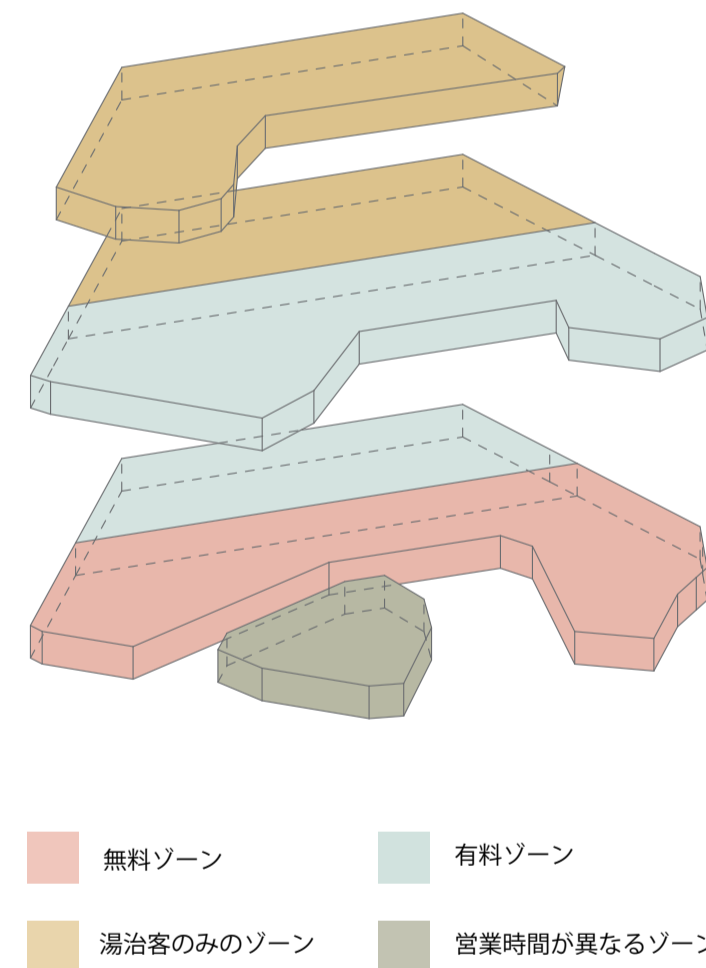
□ ボリュームの決定

敷地北側の道路の向かい側には一階建てのコンビニ、住宅など低い建物が広がっている。対して南側には3階建ての店や施設があり、さらにその奥には山が広がっている。敷地周辺建物や地形を読み取り、**まちと建物を緩やかに繋ぎ、圧迫感を感じないようなボリューム**に決定した。



□ 配置計画

各機能を、有料ゾーン・無料ゾーン、湯治客のみのゾーンや、営業時間により配置した。



□ 建築の形態

この土地の特徴であるシラス台地の地形を表現する。



□ 湯治客のターゲットの例

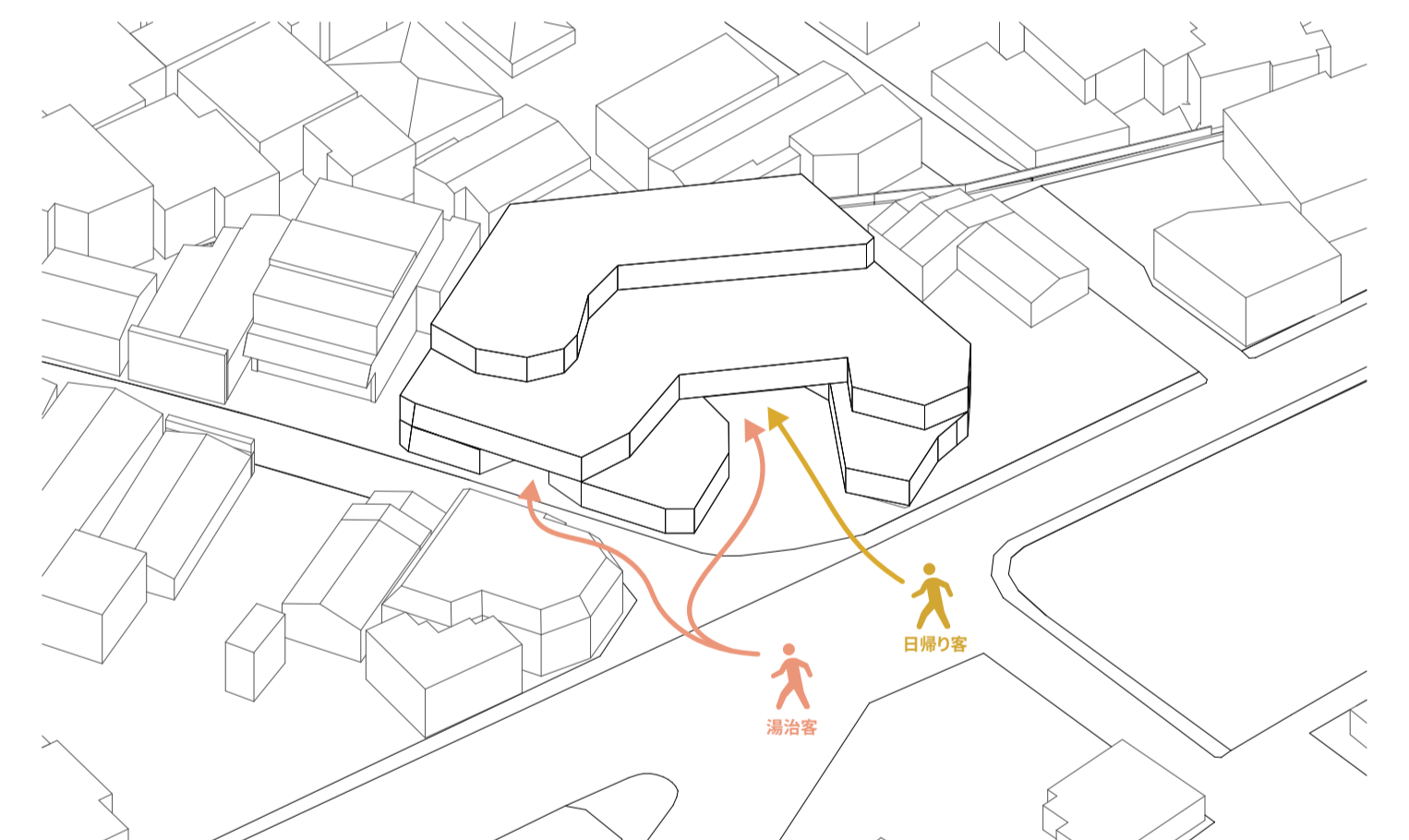


▲1日のルーティンの例

□ 平面ダイアグラム

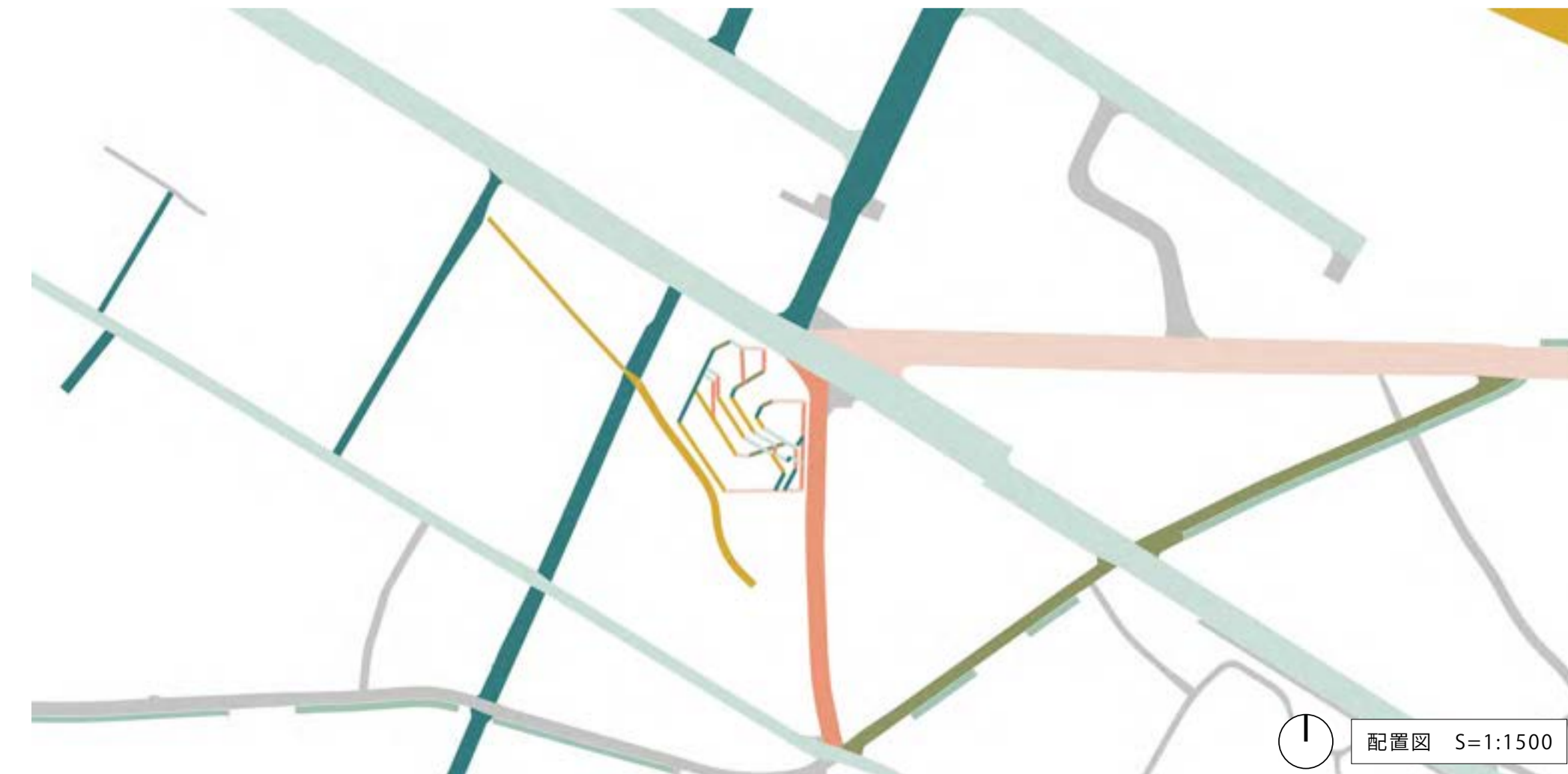
I. 外からの導線計画

前面道路からと駅からの人の流れを受け止めるような形状。宿泊客と日帰り客の出入り口を分けることで溜まる場所と通行の場所を分類し、混雑を防いでいる。



II. 壁のルール

敷地は、土地の地形や、温泉排水に利用されている水路に沿ってできた不規則な道のまちにある。その道をテンプレートの壁を敷き、地形の歪みを反映した。この複雑な形状がシラス台地の自然にできた形より近いものになる。



配置図 S=1:1500



温泉プールの様子 水着着用の、温泉でエクササイズができる場所。歩き湯(敷地の南東の川に沿って外の景色を見ながら往復50mを歩くことができる)、運動湯(湯中運動をする)、寝転がり湯、サウナ、水風呂で構成されている。



1階平面図 S=1:200



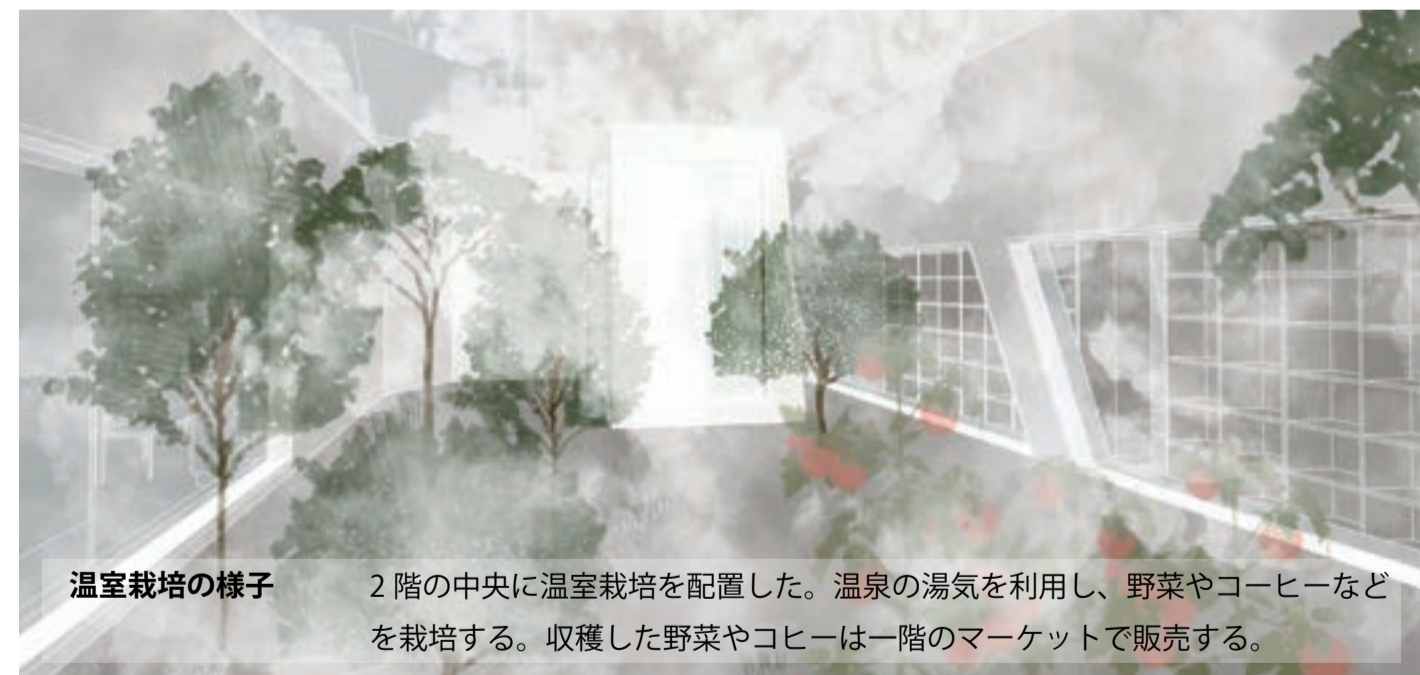
マーケットの様子 湯治客、プール利用者、地域の人々など、様々な人が自由に利用できる場所で、大人から子供までが集う。蒸し釜を利用し、自分で野菜を調理できる。



リビングの様子 吹き抜けを介して2階と3階の湯治宿を繋ぐ。3階と2階に宿泊している湯治客が利用する。大階段をソファとして利用し、ゆったり過ごすことができる。



寝落ちコーナーの様子 湯治客、プール利用者がながりながら本を読む。プール利用者は乾燥室を通り館内着を来ていることで利用することができる。



温室栽培の様子 2階の中央に温室栽培を配置した。温泉の湯気を利用し、野菜やコーヒーなどを栽培する。収穫した野菜やコーヒーは一階のマーケットで販売する。



蒸いもやの様子 歩道に近い場所に湯気を利用した蒸いもを販売する店を配置する。通行人や下校中の小学生が立ち寄るきっかけとなる。



勉強コーナーの様子 地域の子供の勉強する場所が少ないことを受け、一階マーケットの隣に勉強スペースを設ける。



2階平面図 S=1:200

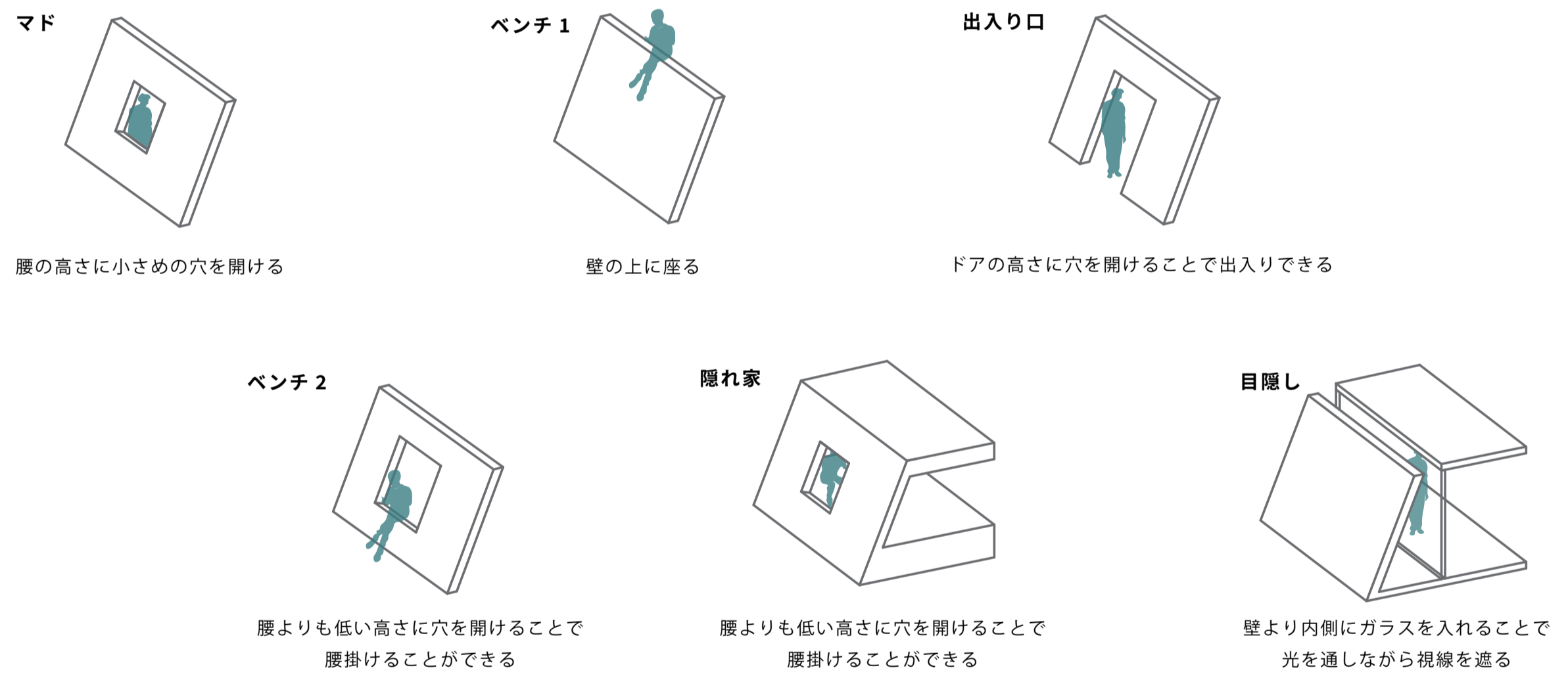


3階平面図 S=1:200



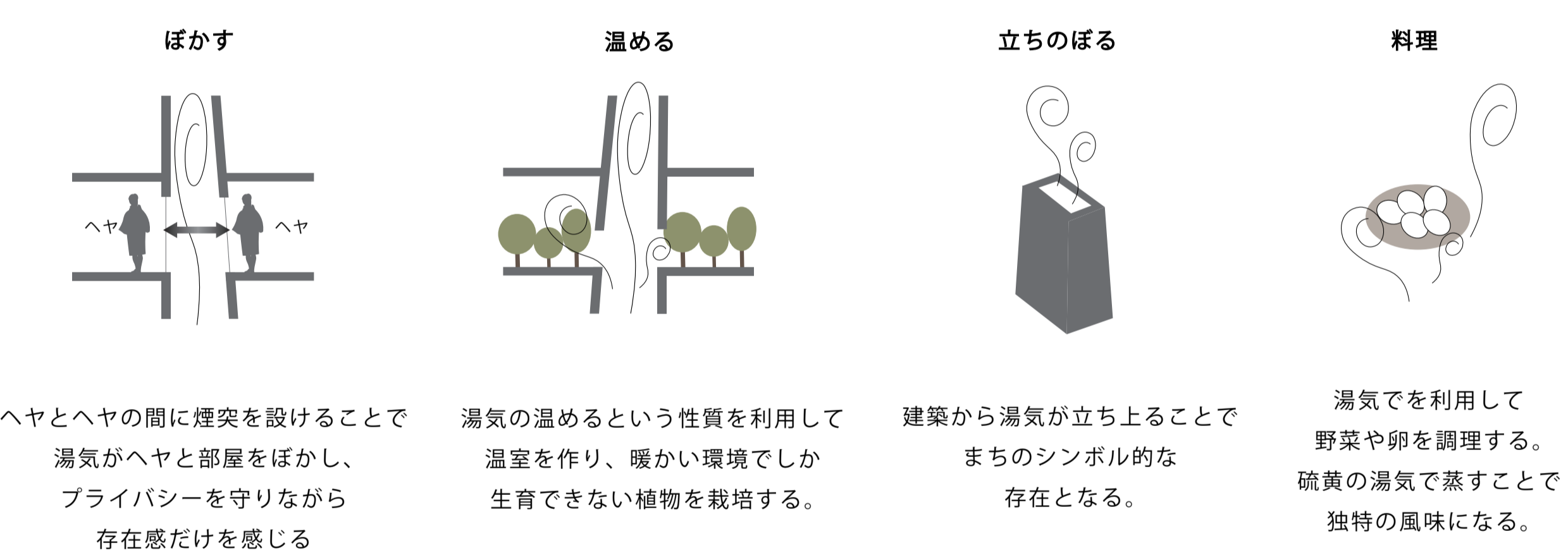
□ 壁が作り出す様々な居場所

シラス台地の崖を表現している穴の壁に様々な場所に様々なパターンの穴を開けることで、様々な用途が生まれ、台地の中に住むように過ごすことができる。



□ 湯気の活用

湯気がまちにあふれ出す様子は温泉地特有の風景である。湯気の性質を利用し、建築に取り入れたりアクティビティに活用したりする。



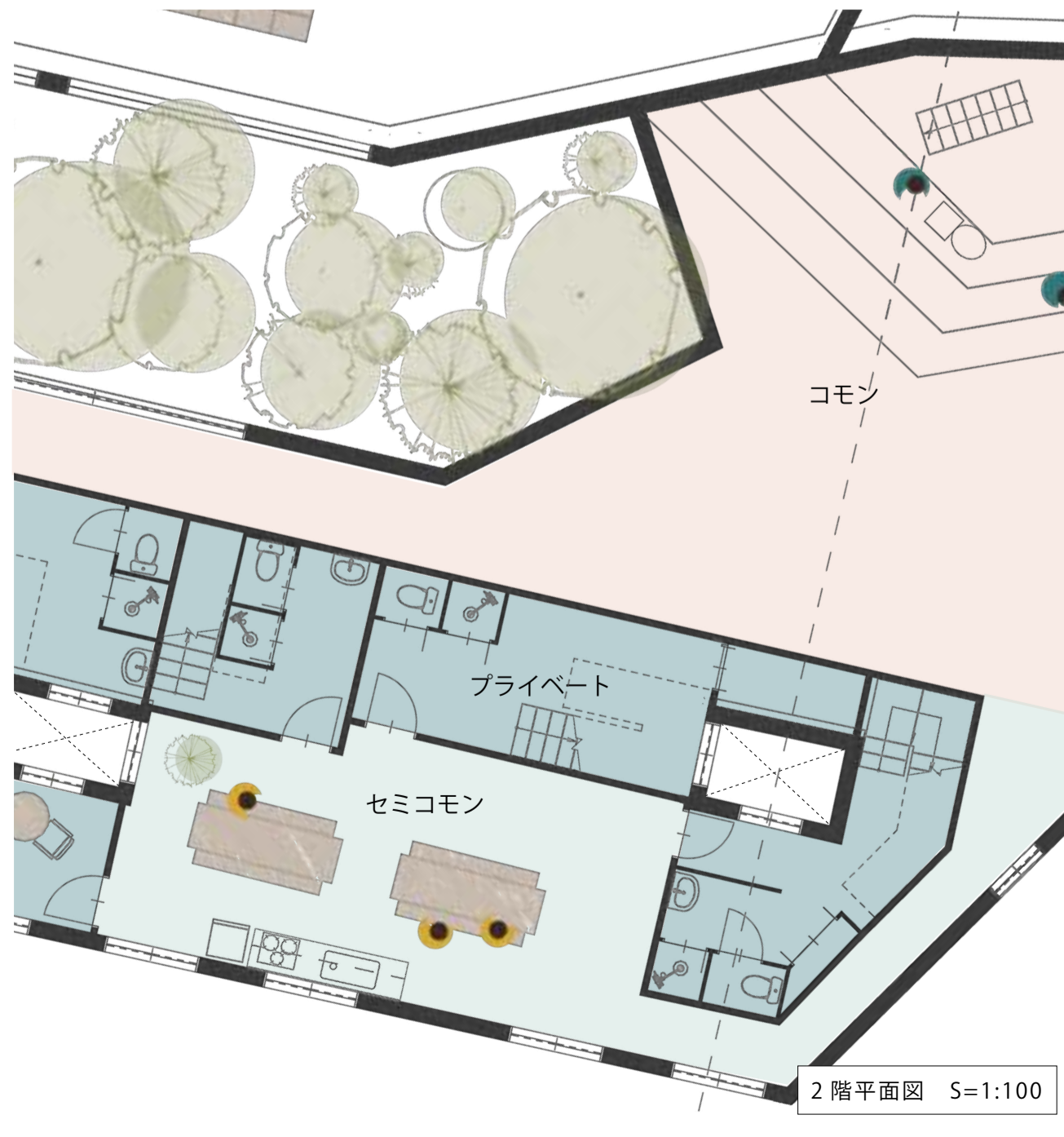
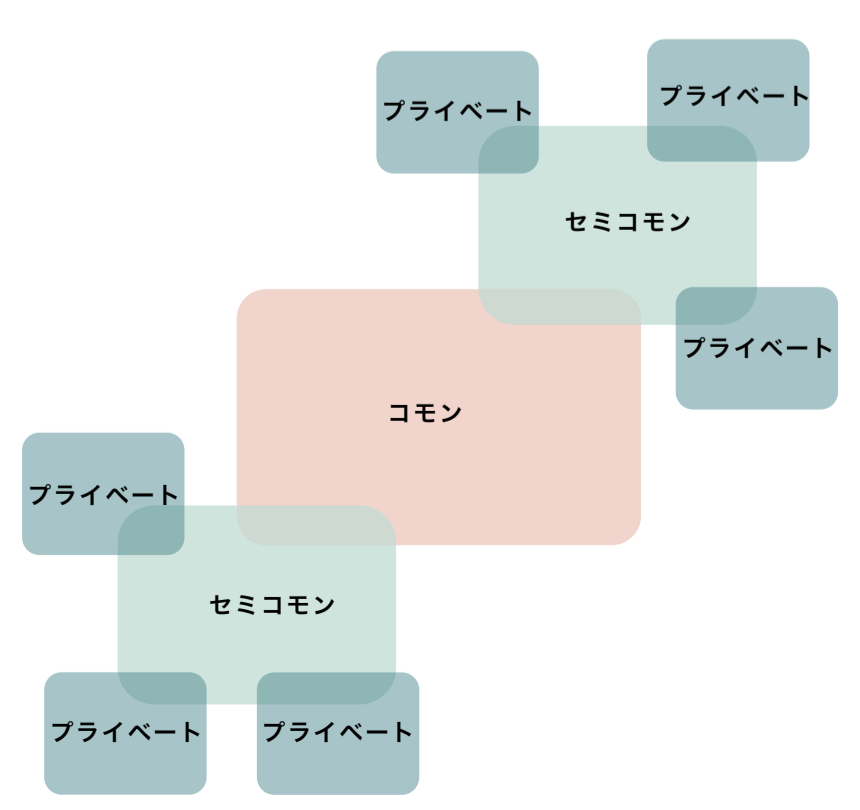
□ 館内着でまちに出る

貸し出しの館内着を着ていることがチケット代わりとなり、館内と外を行き来できるシステムとする。施設の活気がまちに溢れ出し、まちの賑わいづくりを目指す。



□ 湯治客が交流する仕組み

湯治客が部屋にこもりきりにならないように、**プライベート**、**セミコモン**（プライベートとコモンの間）、**コモンの空間に分け**、湯治客の居場所を複数作することで、湯治客同士がそれぞれのペースで交流することができる。各居室はプライベート、ダイニングキッチンは3～4部屋の湯治客が共同で使うセミコモン、リビングは大階段になっており、2階、3階の湯治客が共同で使う場所になっている。



□ 休憩場所

二階に配置された休憩場所は談話・本を選ぶ・読書する・寝落ちできるコーナーがあり、談話など音が出る賑やかな場所から寝落ちできるような静かな場所へグラデーション形式に配置している。別の用途であるが、壁では区切らず一つの空間で繋がっている。

